

た移抄計画に着手している。

北米印刷・出版用紙事業からの撤退を検討…日本製紙は今回のノーバック社保有持分売却に引き続き、米国において電話帳用紙を中心とする中質紙製品の製造・販売を行う日本製紙USA (Nippon Paper Industries USA) について

も、現在、事業売却の方向で検討を進めている。これにより、北米における印刷・出版用紙事業からは撤退し、今後は今年8月末にウェアハウザー社から譲受を完了した液体用紙容器原紙事業など、成長が見込まれるパッケージングや産業用紙の分野に注力していく考

えだ。

【今後の見通し】

北米印刷・出版用紙事業の見直しを進めるに当たり、日本製紙はノーバック社の持分売却に伴う損失約90億円について、2016年度の第2四半期決算で特別損失として計上する見込み。

日本RPF工業会が工場見学会を開催

総勢69名が日本製紙・岩国工場などを訪問

一般社団法人の日本RPF工業会(略称:JRPF、会長=長田和志・日本ウエスト社長、正会員52社)は去る9月27~28日、工場見学会を開催した。同会は会員企業に研鑽の機会を提供するため、技術品質委員会が中心となって定期的に同業や関連業種の工場見学会を実施している。第4回の見学先は、(株)オガワエコノス・鶴飼/本山の両工場と日本製紙・岩国工場で、合計69名と多数が参加した。

最初に訪れたのは会員企業、オガワエコノスの鶴飼工場(広島県府中市)で、RPF製造や古紙のプレス、容器包装の選別工程などを見学した。特にRPFでは、成形機の負荷状態を確認できる大型表示盤を利用した生産性向上の取組み、また破碎機に入る際の安全確認作業など、現場ならではの改善事例が紹介され、「大変参考になった」との声が寄せられていた。

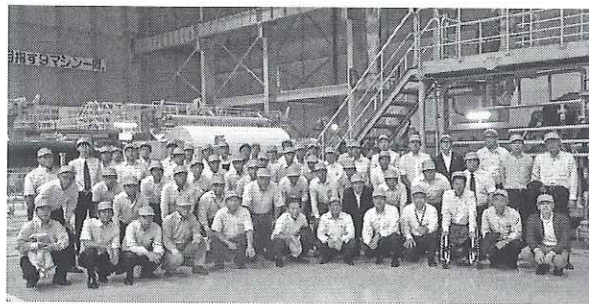
また本山工場(同)では、一廃から資源を選別する工程や食品残渣を利用した堆肥製造、廃家電の解体、PETボトル選別、新焼却炉など多彩な作業を見て回った。地域

社会から信頼・評価される存在となるため、売り手よし・買い手よし・世間よしの「三方よし」を基本に、役員・社員が一丸となって取り組んでいる様子を実感で

きる見学だった。参加した長田会長も「オガワエコノスが取得しているOHSAS(労働安全衛生に関する国際規格)について、安全への取組みの一環として業界全体で学んでいく必要があるのではないか」と問題提起を行っている。

一行は翌28日、日本製紙の岩国工場(山口県岩国市)を訪問。ビデオによる工場紹介の後、RPFなどが利用される燃料受入設備、9Bボイラー(10.3MPa<505℃>180t/時)、最先端のN9マシン(706t/日)を見学。ワイヤー幅8,050mmの大型抄紙機が、設計能力1,200m/分というハイスピードで稼働しているのを間近に見た一行は、そのスケールの大きさに圧倒された様子。

説明者から「岩国工場は日本製



岩国工場N9抄紙機建屋内で記念撮影

紙の中では「西の横綱」と呼ばれている」との説明があったそうだが、参加した技術品質委員会の海田周治委員長は「敷地面積や設備だけでなく、従業員の方々の努力がそう呼ばせているのであろう」と感想を記している。

また日本では4工場しかない、チップ船がダイレクトに接岸できる専用岸壁(C2バース)を持っていることも、岩国工場の大きな特徴だが、この日はタイミングよくチップ船が接岸しており、チップを構内へ搬送している有様が実見できたという。海田委員長は「今後も勉強会や見学会を通じて会員間の情報共有を図り、業界全体のレベルアップにつなげていきたい」と抱負を述べている。